

詩 追憶のカイロ (3)

とよださなえ

以下の詩は、とよださなえさんが、NHK 記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんがカイロで暮らしたのは、今から50年近くも前のことになりますが、その頃のカイロには、第4次中東戦争（1973年）後のざわざわした雰囲気と同時に、フランスやイギリス支配時代のヨーロッパ文化の名残を感じさせる、いわゆるスノビズムの面影がありました。とよださんは、エジプト人のメイドと運転手たちに助けられて幼い子供たちを育てながら、近隣で紛争や内乱があれば、何があっても飛び出していくジャーナリストの鑑のような夫君の帰宅を、待ち続ける日々を過ごしていました。

そのような暮らしの中から紡ぎ出された「ことば」の数々は、50年の時空を超えて、今日でも私たちの心を動かします。今、改めて「とよださんのカイロ」から、人の気持ちの変わらない優しさを読み取ることで、この分断した不安な世界をつなぐ何か暖かいものを感じることができるかもしれません。

今月の掲載は、「詩」ではなく「散文詩」の形式をとって書かれたものです。第4次中東戦争後に行われたエジプトとイスラエルの間での戦死者の遺体交換の行事に立ち会うために、戦後初めてのシナイ半島公開取材が記者団に許可されたことがありました。150人の外国人記者たちが集団で貸し切りバスに乗ってシナイ半島へ遺体交換式の取材に出かけた時の描写です。記者たちにとっては非常に重要な機会ですが、いつも家で夫を待っている主婦たちにとっても、興味深い旅行でもあったかと思いますが、日本人の女性の参加者はとよださん一人だけ、貴重な目撃者となったのです。

（今月の詩は縦書きでお届けします。読みにくい点をご容赦ください。）